

2019年3月23日

薬学教育協議会 第19回 病態・薬物治療担当教員会議

- 【開催日時】 平成31年3月23日(土) 12:15～13:00  
【会場】 L会場(幕張メッセ 国際会議場1階 104号室)  
【会費】 無料  
【開催担当】 静岡県立大学薬学部 賀川義之(委員長)  
                  広島大学薬学部 小澤光一郎(次期委員長)  
【出席者数】 51名

1. 情報提供

病態・薬物治療担当教員による情報提供を実施した。

① アンケート結果の発表

静岡県立大学薬学部臨床薬学分野 賀川義之教授

別紙のように、事前アンケートの結果が報告された。医師教員の担当科目は、「薬物療法学」、「疾患学」、「症候学」が多かった。演習などの教育活動では、「フィジカルアセスメント」や「AED 講習」が多かった。9割の大学で医師教員が採用されていたが、改訂コアカリ導入に伴う医師教員の増員が行われた大学は5大学であった。自由回答では、薬学教育における医師教員の重要性を再確認する意見がほとんどであった。

発表内容について質疑応答を実施した。

② 特徴的な事例紹介-1

日本大学薬学部臨床医学研究室 鈴木孝教授

「薬学教育・薬剤師におけるフィジカルアセスメントの課題と展望」

医師と薬剤師の資格を有する鈴木孝教授から、日本大学におけるバイタルサインを含むフィジカルアセスメント能力の向上に向けた取り組みが紹介された。

学部教育におけるピークフローメーターを用いた呼吸機能検査、ポータブル心電計を用いたQT延長症候群の発見方法を薬学生に教授している。また、既卒薬剤師に対するフィジカルアセスメント講習にも、医師教員として積極的に指導に関わり、聴診器を使った呼吸音の聴取や脈拍の測定を行っている。

まとめとして、以下のことが提唱された。

薬剤師が行えるフィジカルアセスメントがあり、日々の薬剤師活動(OTC 薬局、保険薬局、病院薬剤部)の中でこれを生かしていくことが重要である。薬物治療において、患者さんの病態把握、薬の効果判定、有害事象の出現、病状の悪化、新たな疾患の出現などを把握するには、フィジカルアセスメントが必ず必要である(使ってこそ(使えてこそ)意味がある)。フィジカルアセスメントを実践するには、検査値の判読と相まって、患者さんの病態把握が必要である(大学教育では、実践的な症例検討が必要である)。薬剤師が行うフィジカルアセスメントのための機器の使い方・判読、新規機器の開発が必要である(職種に応じた機器の使用・開発が重要である)。

発表内容について質疑応答を実施した。

### ③ 特徴的な事例紹介-2

静岡県立大学薬学部分子病態学分野 森本 達也 先生

「静岡県立大学での取り組み」

静岡県立大学では、薬剤師として求められる基本的な資質の修得を目指しての医師教員の取り組みを以下の様に紹介された。

「静岡の健康長寿を支える仕組みと人々」では、1 年次より多職種講義に触れ、グループディスカッションを通して多職種連携の重要性を身につける工夫をしている。高学年では多職種連携演習で看護や栄養課程の学生と、症例ベースでグループ討議を行い、治療計画を立案している。防災演習では簡易担架の作製実習など実践的な教育をしている。また、AHA-BLS ヘルスプロバイダーコースの認定を受け、BLS ヘルスプロバイダーコースに加えて、CIC や BIC インストラクターコース修了者も出している。モバイルファーマシーを活用した地域医療支援にも取り組み、静岡県内の過疎地に赴き、残薬チェック、お薬相談、健康チェックを推進し、地域住民から好評を得ている。

発表内容について質疑応答を実施した。

## 2. 議題

- ・次々期委員長の選出

次期委員長の小澤教授に人選を一任することになった。

- ・その他

4月に行われる薬学教育協議会の中央会議での状況を受けて、病態・薬物治療担当教員会議としての新たな取り組みに臨むことになった。

### 3. 成果

病態・薬物治療担当教員会議では、医師教員が多く所属している。今回の教員会議を通して医師教員の薬学教育への具体的な取り組み状況が明らかになり、また多職種連携教育を含んだ医学教育との連携の重要性が再確認された。